

学会参加報告—GPS 首輪に関わる技術について

島田 駿 (ワイルドライフマネジメント事業部 関東支社)

島田からは、「GPS 首輪に関わる技術」についてご紹介いたします。

獣害対策において、対象動物の利用場所や分布を把握する「情報の見える化」は計画の策定や対策後の評価に関わってきます。その中でも GPS 首輪の装着は有効な手段と言えるかと思います。口頭発表 (OC-02) では、データのクラウド保存による省力化と太陽電池による長期運用を可能にした GPS 首輪の開発について紹介がありました「獣害対策を目的とした低労力で長期間の位置データを取得可能な次世代型 GPS 首輪と住民参加型総合対策プラットフォームの開発」。

携帯電話で使用している通信網を使用することで GPS データをクラウドに直接送信するため、GPS 首輪のデータダウンロード時の調査員が首輪まで近づく労力を省力化できる。また、太陽電池も搭載しているため長期運用が可能 (『太陽電池未使用で通常通り 1 日 1 地点 GPS を送信する場合は 1 年』『太陽電池使用の場合、ニホンザルでは放獣後約 6 ヶ月でほぼ 100%。ニホンジカでは山奥に放獣後約 10 ヶ月で 70%』) というものでした。

労力の省力化と長期運用は確かに調査員としてもありがたいです。特に人慣れしているサル群に装着すると管理しやすくなるのではないかと考えられました。しかし、首輪の脱落はベルトの劣化による自然脱落ということだったのですが、GPS データがしばらく入ってこないため圏外で脱落した可能性が高く回収しに行くとまだ付いていたという場合も十分に考えられるため遠隔での脱落も可能にしてほしいかなと思いました。今回の紹介

はサル、シカ用ということですが今後クマ用もとなってくると脱落が課題ではないかと思いました。

送信されたデータの閲覧は専用ポータルサイトを使用するのですが、GPS 以外にも地域住民からの情報を入力したり、首輪装着個体が近づくと接近アラートで知らせる機能もあるということでした。集落の状況把握にアンケートを配布して回答してもらうという方法がありますが、現地で直接入力された情報を閲覧することができるため、こちらでも対策の省力化となります。アラート機能も、対象動物が近づいてきた際に地域の追い払い員や住民が入力された情報をもとに先回りして追い払いをする。といったように効率よく集落を利用場所として認識させなくすることもでき、「情報の見える化」を効率よく行う技術として今後、色々な地域で普及する期待が持てる紹介だと思いました。

今回は学会への参加というものが初めてだったので理解できるのか不安でしたが、行政や捕獲関係の話で共感・理解できる話もたくさんあり有意義な時間となりました。今回得た情報を WMO の業務にどう関わらせていくのか日々考えながらこれからも精進していきたいと思っています。